

會學濟經學大國帝都京

叢論 經濟

號二第卷七十五第

統制經濟の運營……………高田保馬

支那銀行業の整備課題……………徳永清行

ペツテイの經濟理論……………白杉庄一郎

支那財政改革運動の起點……………柏井象雄

明治初年に於ける日本經濟への内省……………堀江保藏

合衆國海軍委員會「アメリカ海運の經濟的調査」……………佐波宣平

叢報

行發月八年八十和昭

支那銀行業の整備課題

德 永 清 行

一 銀行業の地位

支那における銀行業は外部的に諸種の制約に牽引されてゐたが、銀行業自體の依存すべき基礎的地盤として産業との密接なる關係を得ざりしものである。金融調整の中樞機構を取出して見ても、上部よりの財政重壓があり、下部の普通商業銀行はその統制の對象外の存在であつた。又側面における特殊銀行の動向も未だ緊密なる有機的構成に至らざるままであり、加へて外部よりの列強金融支配力に煩されたことは多くを語るを要しないところである。一九三二年頃までの銀價と支那恐慌の交流事情は世界の注目を惹いた事象であるが、この頃における銀行業の動向は變則的乍ら活況となつて現れたものである。爾後世界恐慌の影響が支那に及び支那金融界は漸く萎縮の傾向にあり、別途に天災あり、滿洲事變乃至第一次上海事變の勃發あり、支那國民經濟としての影響には少からざるものが生起した時期となつてゐる。銀行業としてもかかる環境の下にあつては、當然發展を不可能とするわけであるが、然るに當時の銀行業は事實上において必ずしも衰頹せざりしものがあり却つて銀行數の増加といふ現象を惹起した。これ等動向を明示すべき嚴密なる數字としてではないが、この趨勢を概觀せしむるに足る資料として左のものを先づ掲げて見る。新設銀行は一九三二年以後にあつても歷年増加して居り、一九三四年には二十行に達してゐる。その前後における若干の數字を掲げるに次の如くである。

開設銀行年別統計

年度	設立銀行數	民國二十年	二十四年	二十八年
二十一年	一四	二五年	五	二九年
二十二年	一六	二六年	三	一
二十三年	二〇	二七年	一	二

この點について理由付となるところは支那側の記述によるに次の如きものがある。第一は一九三二年即ち民國二十一年以後にあつて内債は依然として發行されて居り、銀行の政府に對する立替金額も亦非常に多く、この種公債は、少くとも半數以上は銀行の手中にあつた。かくして銀行は政治投資の方面において利殖の途を有してゐたのであるから商工業の衰微に隨伴して衰退するといふ結果に陥らなかつた。第二は當時數年來、銀行資本はただに中央財政との關係日に密切に向ひしのみならず、各省の地方財政との交渉も亦頻繁となつた。各省の財政は一方面では農村破産の影響を受けて、歳入大いに減じ、又一方面では匪賊剿討、道路修理及び災害救済等の關係よりして、支出多額となつた。ここにおいて各省當局は財政收支の適合を求める建前において、遂に上海に趨き以て救済を謀らざるを得ざることになつた。公債を發行し、公路を築造し、河渠を修造し、倉庫を建設し、甚しきは經常的なる政治費を配分するに至り、均しく煩はしくも上海に向はねばならなかつた。かくして上海の銀行資金はこよりして多くは一條の出路を見出したわけである。第三は當時數年來銀行業が平常通り發展し得た所以は、各地錢莊業の普遍的な衰退とも亦密切な關係があつた。錢莊業は民國元年より以後、漸く實力逐次恢復し一九三二年以前にあつては錢莊業は一方面において外籍銀行と聯絡をとり、又一方面において内國銀行の遊資を

利用して事業を經營し、勢力は雄厚なるを加へてゐたものである。然るに一九三二年以後にあつては、錢莊業の衰勢は顯れ來つて、奥地の錢莊は農村經濟の崩壊及び一般商工業の陸續たる倒産に因り、預金は遞減して然も貸付は回収困難となつた。加ふるに一九三二年以後にあつては、上海銀行業は奥地の錢莊に對する貸付を大いに緊縮したので、錢莊はここに兩面から壓迫を受けることになり、遂に普遍的に衰滅せざるを得なかつた。奥地錢莊の普遍的なる衰退の結果、都市錢莊も亦自ら影響を受けるに至り、ここにおいて當時數年來、錢莊業は全く恐るべき恐慌怒濤の中に突入して自ら救ふ術を持たなかつた。奥地錢莊業の勢力失墜により、銀行業は即ち奥地にあつて發展することを得たが、ただ第二次上海事變以前にあつて銀行が奥地に支店を急激に開設したこと及びその數字の突然的に増加したことを検討するならば、この間の消息を明瞭ならしめることが出来る。²⁾

以上の理由によつて支那銀行業が不振に陥らざりしを確め得るとしても、このことは錢莊業との交替を除いては銀行業が本來推進すべき軌道においてでないことを明示したものであり、錢莊業との代替にしても銀行と産業との緊密化を招來したものののみではない。由來支那經濟における銀行業の進路は畸形的であり、畸形的推移の故に堅牢なる基礎付に缺いだわけではあるが、そのことの故に銀行業の地位が軟弱なものとなつてしまつたことを意味しない。業務上にも組織上にも一見脆弱なることは然りといはざるを得ないが、畸形的に推移せる一種の商業銀行的性質を帶び「商業銀行化」してしまひ、商業預金の一途に競趨したことは、固より金融機關としての本來の使命は果したものではないけれども、金融機關としての存在は微弱なるものではなく、支那國民經濟上優勢なる地位を把持してゐたことを看過してはならない。殊に外見對立せるかに見えし、舊式金融系統としての錢莊乃至銀號も、更に外籍銀行も、商業銀行としての支那新式銀行については或は人的に或は地域的に交渉を持つた

ものであり、加之政府は財政窮迫の故に公債政策を繞つて新式銀行とは關係深甚なりしものがある。銀行制度としては整備せざりしままに固よりそれは商業銀行としての健全なる進路ではなかつたとしても、普通商業銀行の持つ地位には有力なるものがあつたわけである。今次事變下においても、銀行業は衝擊を受けつつもその地位を保全したかの觀がある。併し乍ら今次における銀行業はその外貌が従來と同様な傾向にありとしても、内實的には畸形的性格を一擲しなければならぬ一大契機に到達してゐる。

事實、支那銀行業の地位には牢固たるものがあつたが、その強靱なることの内實は上掲に引用せし如く變則的なるにおいてであつた。支那銀行業の發展は不平衡であり、業務上に未だ鞏固なる基礎を建設せず、組織上に嚴密なる系統を確保せずして、この二點のみよりしても、將來の發展における暗礁を形成すとは支那側自體における憾嘆であつた。¹⁾業務上に強力なる地盤を構築してゐないことは業態上について金融と産業との緊密なる關係が保持されてゐないことに徴することが出来る。併し乍ら金融と産業との關係が疎略であつたことの故に金融の持つ地位が微力であつたことを意味しないといふべく、それは若干前顯の如くである。又組織上に確固たる體系が出来てゐなかつたことはその地位を劣弱にしたものではないとしても支那の銀行制度を極めて散漫なものとした。それは形式的には各別に特殊使命を負へるが如き名義上の存在ありとしても、中央銀行を金融中樞とする體制の整はざるままであり健全ではなかつたが、そのことの故に微力を意味したことにはならない。

民國二十四年春、舊國民政府はその幣制改革の以前において、既に金融統制に乗出して居り、幣制改革に當つては金融機構について全面的調整の意圖を明言するところがあつた。この幣制改革がその前因後果として支那銀行業へ影響したところは支那金融貨幣側面における劃期的段階を區劃づけたものである。金融機構に即しての

爾後における展開には中央金融機構の強化として、或は地方金融への統制として、更に普通商業銀行への措置においても積極的なものを見るを得るが、小稿は整備の課題を主として普通銀行業の領域において、建設支那の地域において取上げるものである。

二 業態の基礎

金融と産業との密接なる關係にあるべきことは支那の場合においても固より何等例外をなすものではない。既に早く支那經濟建設の必要上金融の持つ役割は確認されたものであるが、自國資本はこれが要求に應じ得ざりしものであり、外國資本も亦これが要請に答へ得ざるものであつた。もつとも外國資本の支那進出については簡略にかくの如く論斷はしたけれども、支那自體の外資受入の態度と外國側の資本送出の性格とは吟味せらるべき課題を持つたものである。¹⁾それは兎も角として支那にあつては幣制改革の持つ金融と産業との緊密化の意義は人なるものであつたが、幣制改革の役割の一端をここに強く認むるとしても、それはそのままに軌道に乗り得たわけではなかつた。支那側の文獻によつて、この線に沿ふ見解を拾へば次の如きがかかる傾向を代表したものである。²⁾

支那においては幣制改革後に至り始めて建設事業の各端は成功を見、全國經濟は欣々として繁榮に向ふ兆が顯現した。故に吾人が支那金融發達の過程を研究するに際しては當に支那の一般經濟現象、殊に産業方面の變遷を先づ看取しその上に明察の觀察を以てしなければならぬ。蓋し金融と産業は不可分の密接なる關係にあるからである。詳言すれば一國の金融は必ず産業が之を維護するに賴り、而して産業の發展も亦金融が善く調

1) 李銘、支那現下の經濟政策、國際評論、第四卷第四號。
2) Chen Chia Tsün: Das chinesische Bankwesen, 1938, SS. 97-98.
3) 中國戰時金融政策之鳥瞰、經濟研究、第二卷第八期、p. 20.

整することにかかつてゐる。支那は近年來政府の積極的な建設の唱導に依り、工商業をして逐次滋長繁榮の境地に導入せしめ、今日の資本制度の雛形を生成し今後應に趨くべき道程の啓示を與へた。故に今日の支那金融は已に單純なる個人信用を藉りて之を一般的な資金貸借及び調劑關係を成すものではなく、一般産業界を相當程度の發展に到達せしめ資本蓄積を爲すものである。他面においてこの蓄積資本を以て信用制度の確立により善く不息の運用を爲し、以て支那國民經濟の繁榮を助けるのである。

支那金融業の實情はその過去においても、金融業と産業との關係の密接に保持さるべきは要請され乍ら實現せざるまであつた。事變に入つての動向としても、商工業との關聯緊密なる要望を達成せしめ得ざるままであつた。事變下における金融業の外貌は繁榮に向へるものの如きがあるが、固より畸形的繁榮であり、ここには囤積居奇の投機目的が一途となつてゐたことは均しく首肯されるところである。支那に限らず各國均しく戰時金融の課題となるところは、短期流動性の預金を長期固定性の貸付として運営することであり、この信用媒介の使命において考慮されるところは信用創造の役割においても考察されなければならない。然るに支那の場合この操作は殊更に澁滞せざるを得ない事情下にある。概言して支那金融業における信用媒介は商業資本としても高利商業資本の性格を持ち勝ちのものであつたし、産業資本としての作用には未到達のものであつた。信用創造については一見早きを思はずものがあるが、固より正常なる顯現ではなかつた。即ち銀行券發行の不統一なりし過去においてはここに信用創造に關する回顧の餘地があり、舊式態様をそのままに踏襲せる信用貸付の膨脹はここに信用創造についての考慮の分野がある。従つて金融業についての過去の業態はその預金の受入に當つても、貸付の放出に當つても、金融業が健全に且廣大に求め得るものではなくして、不健全に且狹少なるにおいてであつた。然も

事變下においては、預金の受入はこれを認め得るとしても、當座預金としての増大であり、定期預金としての増大ではなかつた。かくの如く當座預金の比率が大となつて來たことは戦時に起り勝ちの傾向ではあるが、戦時金融の目標に逆ふものであるとはいふまでもない。爾餘の銀行券問題は既に統歸されたる建前においてであり、信用貸付の流弊は當然矯正を必要とした分野のものである。

三 業績の持續

支那銀行業について事變下の動向を検出するに預金と貸付の増減如何については一應の概點がある。戦時下金融新體制の要望さるるは建設支那においても、抗戰支那においても事情を異にするものではないが、建設地區においても戦亂の跡を受けて一時的乍ら商工業の全面的停頓ありたるは避け得ざりしことであり、抗戰地區においては西南投資の如き提唱ありたりとしても商工業の基礎が定まつてゐなかつたことは當然である。この變調時期においてはたとひ預金は増大するとしても短期的なる當座預金においてであり、長期的なる定期預金については減退の現象となり勝ちである。支那の場合、預金増大を認め得る過程については當座預金の増加は取上げ得るが、上海における十一商業銀行について報せられたところによれば、定期預金は事變前において總預金の六割を占めしものから、二割に減退し、逆に當座預金は四割から八割に増大してゐる¹⁾。因みに當座貸付は並行的に伸張し得たものではなく、又定期預金は減少して定期貸付も減少した。もつとも中國銀行の業績には事情を異にするものが見受けられ、²⁾ 又預金と貸付との比率については後顯の如き事情が生起したものである。

事變直後の事情としては、預金の引出、資金の逃避等によつて一時預金減少となつて現れるべきものであつた

1) 中國商業銀行之今昔觀、銀行週報、第二十七卷第十三、十四卷、P. 2.
2) 中國銀行業之組織及其業務、第二卷第八期、P. 46.

が、爾後の事情を織込みて、例へば一聯の非常時金融對策の結果として急迫面を脱却し、避難者の持運び、戦區金融機關の移行、退藏法幣の搬出、華北資金の逃避、外國逃避資金の部分的還流等によつて銀行預金は増大し、特に當座預金としての急速に膨脹したことを知るを得る。殊に上海についていへば遊資集中の現象となつて各銀行の預金は戦前に比し減少せざるのみならず、増大したものである。この預金の増大は既述の原因を反映したものであるから、銀行職能としての信用創造の運営に依るものではなく、銀行の信用媒介に據るとして見ても、然も膨脹せる通貨の部分的代理保管としての不安定なる事情に因るものであつた。されば定期預金の増大ではなく當座預金の増加となつたものであり、事實上非常時色彩に被はれたる活期存款即ち當座預金が最大にして、定活兩便のもの次位であり、定期存款少く、従つてかかる現實は建設部面の要求に沿ふに乏しきものであつた。³⁾支那の場合、この一聯の事態は商業銀行がその本然の目標へ未到達なる經過的過程においての現象と見るよりも、一面逆轉したものでさへある。蓋し新貨幣政策實施以降にあつては金融統制が強化されて居り、中央、中國、交通、中國農民銀行による紙幣發行權の集中は商業銀行をして所謂信用創造の分野を著しく制約したものであつたからして、事變以降にあつては當然この制約下における預金の増大であり、然もその預金は國民的投資の反映を條件とするものでなく、ただ遊資としての過剰通貨の預金であり、その貸付の出路を求め得ざるままに單なる通貨の保管にとどまるものであつた。過剰資金は金利の高率なるにおいては銀行預金に吸収される度合を高めるであらうけれども、貸付としての出路を求め得ざる限り、預金利率の引上のみにおいて過剰資金を吸収し以て投機行爲を制約することには限度が比較的早く來るわけである。普通商業銀行の預金増減の不安定性に備へ預金準備増加のためにも、換物傾向の激化に備へ囤積行爲防止のためにも、金利の引上は有效ではあるが、自ら割される限度は

超へ難いものである。⁴⁾

預金が増大して健全なる貸付が伴はないとすれば、收受された預金の處置は如何になつてゐたかが大きく浮上る。先づ最初に現れた事象は預金が増加して貸付は減少といふことにおいて各銀行の保持する預金準備が増大する。それは存放同業としての増高となつたことが強く現れて居り、銀行資金の出路の困難並に存放同業より出づるを得ざりしを語るところであつた。⁵⁾もつとも存放同業として安定性なき預金の増減に應ぜしむる要よりして、存放同業は出路の困難とは別途にあつても準備金保有の役割において必要視せられる。次に各銀行の有價證券が一律に激増してゐる。それは公債の購入が最も有利な方途となつて居るからであり、それは健全なる公債消化としてでなく、在來の支那金融における公債がともすれば重壓となり、投機となりし性格より出でざりしままに置いてである。貸付は一時に回收を困難とするが、公債はそれが容易であり、且危険性も大ならずとしてここに預金の出路があり、等しく投機的とはいへ、房地產への投資は停滯の虞があるけれども、公債には流動性があり、一應の出路となる。次に預金増加に反映した資金の出路としては公債について其他有價證券の所有が増大した觀點がここにある。⁶⁾從來、支那銀行としてはその特徴とさへいはれた房地產についての投資關係には著しい變化は起つてゐないもの如くである。

戦時下における支那銀行業はその地盤が戰闘地帯たりしことに徴して收支上に異常なる缺損をすら想起せしむるに足るものがある。然るに純益額の減退の程度にとどまり、缺損を訴ふる向の比較的緩和されたるには一考を要する。⁷⁾當座預金は日歩低率なりとはいへ(四厘程度であり)、この利拂ひや預金運用の硬塞は銀行収益の減退理由となるものであり、定期預金の支拂利息は高率となるから(約八・九厘)銀行としての負擔を加へるものであり

4) 前掲、銀行週報、第二卷第八期、p. 2.
5) 前掲、經濟研究、第二卷第八期、p. 48.
6) 前掲、經濟研究、第二卷第八期、p. 50.
7) 前掲、銀行週報、第二卷第八期、p. 48.

定期預金の増大は運用の途開かれざるにおいては収益を減退せしむることになる見地がある。そのことの故に銀行側が定期預金の受入を回避したといふことは固より考へられない。然も背後には戦亂による被害も推測され得るにおいて、減少したりとはいへ収益を告げ得るには、それだけの理由が求められなければならない。銀行業としてはその本来の業務とせざる兩替機能に介入して、外國爲替の賣買があり、投機を背景としての財貨への放資乃至かかる關聯における擔保貸付、證券賣買等がここに検討されなければならぬことになるは既にその一端を試みたところである。

戦時下金融の動向として、その積極的工作の建前において取上げられることは建設地區にあつての金融機關の増設があり、整備がある。抗戰地區にあつては嚮に省市立銀行及び農工銀行の分支行増設を繞る事情があるが、その何れにおいても未だよく資金出路に條件を充し得るものではなかつた。⁹⁾ 支那事變下における銀行預金の増加といふことを一應分析して如上の経過を説述したが、これを貸付について見るに、商業銀行、儲蓄銀行八行預金及び貸付高についての數字を掲げれば、貸付も亦程なく増進傾向となつてゐる。¹⁰⁾

總計	一九三六年	一九三七年	一九三八年
預金	一、四七七、三三四元	一、〇〇六、一〇〇元	一、六六六、四三三元
貸付	一、二七〇、五五五元	一、一五〇、五五五元	一、五八六、五五五元

右表によれば一九三六年と三八年との比較においては預金は十四億元から十九億元へ増大し、貸付は十一億元から十六億元へ増大してゐるが、就中三七年と三八年との對照において貸付の増大となつてゐる。正常的には貸付増大の原因を求め得ざるままに、貸付が數字的に増加してゐることは部分的なる數字の取扱ひではあるとしても、その現れたる貸付増大についての原因を分析して探索することが必要である。戦後における銀行業活動の動

十七卷第十三、十四期、p. 2.

8) 經濟研究、第二卷第八期、p. 54.

9) 盛憲徳、戦時中國銀行業動態、助成評論、第一卷第一號、p. 170, pp. 178-179.

10) 金融研究會、事變下の支那金融及び金融機關、p. 101.

向は貸付業務の失調であるといふが、それは固より従來の貸付を健全なりとしての建前においていふことではない。加之戦後には投機の活躍に微妙なるものがあり、支那銀行業は戦時即應の態勢として金融統制の課題を持ちつつ現實には却つてそれに距りしことを取上げて慥かなければならない。

投機目的とはしても預金と對應して貸付が増大して來たことは銀行業態としての收支を均衡せしめ更に信用創造への前進と見ることを必ずしも不可能としない。併し乍ら、抗戰地區にあつては四行聯合辦事處總處の如きもの運営があり、建設地區にあつては北支の中國聯合準備銀行、中支の中央儲備銀行の如き金融中樞が強化され行くに従ひ、商業銀行の變質的なる金融勢力は減退せざるを得ない。それは事變の影響としてでなく、事變を措いて考察しても由來畸形的なるままに金融勢力を把持したる商業銀行の健全化において調整さるべき必然の課題でもある。ただし事變についていひ得ることは戰費調達のためにも生産力擴充のためにも、更に爾餘の理由を併せて膨脹して來た發行券の故に商業銀行の持つ活動性を微力として居り、又商業銀行を通ぜざる投機行爲の故に業務範圍も減退してゐる。金融統制下にあつては商業銀行なるの故に、金融勢力を喪失するわけのものではないが、支那の場合にあつては幣制改革に發する金融統制と戦時經濟に發するそれとの二大原因によつてその金融上の後進性の故に弱點を露呈したものである。普通商業銀行業務の調整は信用貸付の舊機能より手形貸付への改善を繞つてその課題が投ぜられてゐる。¹¹⁾ 普通商業銀行の畸形的發展はその補整によつて、その舊地位より退墜化の現象を呈するとしても、そのことが將來への健全化の新發足となるものである。商業銀行の業績には不振なるものを事變前後を通じてこれを見ずと結論しても、最近における商業銀行の持つ實勢力は相對的に激減しつつある。このことは嘗て改善せんとしても商業銀行の持てる地位の故に却つて阻碍となりたる局面を拂拭し得ることも

11) 前掲、經濟研究、第二卷第八期、pp. 46-48.

12) 金融改善業務之建議、銀行週報、第二十七卷第十三、十四期、pp. 1-2.

なるであらう。

以上要するに支那銀行における殊に上海を中心としての資金の集中があり、然も資金の消化は不良であるといふことが出来る。預金より貸金への媒介としての役割にとどまらず、信用創造の域へを目標として解決されなければならぬ事態がその間に介在してゐることを物語つてゐる。

更にここに關聯して貨幣市場と資本市場との持つ性格を見て置かねばならない。それは事變下の畸形的現象としてでなく、支那金融の持つ後進性についての事情としてでもあるが、今次の事變においてその根本的なる調整を緊急事とすることになつたといへる。

四 機能の補強

新貨幣政策以降にあつては建設的課題を軌道に乗せて取上げ得るを説くが、それは金融についていへば、従來の畸形的推移が正常的發展段階を昇り得ることを意味する。即ち産業方面と金融方面とが密接不可分の關聯を緊密にするを得たるわけであり、一國の金融は産業の保持に依據し、産業の發展は金融の調整に依存するに出路を持つ。宜しく支那金融をして單純なる個人信用を藉りて以て一般的資金貸借並に調整關係をなすものではなく、一般産業界を相當程度の發展に到達せしめ、ここに資本の蓄積なる地盤を持たしむべきものである。更にこの資本の蓄積は信用制度の確立を得て運用健全ならしめ、支那國民經濟の發達を助長せしめんとするにある。併し乍ら事變以降定期預金に代替して當座預金の比率の擴大並に舊法幣より延いて儲備券に互つての發行高とその購買力より歸結するところは相對的に預金増大の持つ意義を減退するについての考慮も一應必要となる。

1) 中國戰時金融政策之鳥瞰、經濟研究、第二卷第八期、p. 20.

2) 中國商業銀行之今昔觀、銀行週報、第二十七卷第十三、十四期、pp. 2-3.

戰時金融の持つ役割は單なる企劃にとどまることを斷じて許さない。産業と金融との相互關係も高度重點主義を必要としての性格を持つて来る。或は戰費調達のために、或は生産擴充のために、戰時金融の使命には緊急にして廣汎なるものがある。平時金融措置としての支那銀行の地位は預金と貸付との關聯において短期流動的なる預金より長期固定なる貸付への圓滑なる移行を果すべきが要請せられたが、戰時金融としても固よりその性格に相異を齎すわけのものではなく、更に一段の強力なる措置を必要とする。

資本用役の長期と短期については資本の固定化と流動化の區別を要する。建設目的に副ふべき資本用役には長期性が伴ひ、短期において資本用役を果す場合と區別されるわけであり、建設課題の擴大は資金の固定化を擴張する。短期資本の市場は貨幣市場と稱せられるが、所謂金融市場がこれに該當するものであり、長期資本の市場は資本市場と通稱されるものである。支那の場合建設課題の進行するに従ひ資本市場についての要望は貨幣市場におけるそれよりも強度となつて来ることは首肯されるところではあるけれども、現實の推移はこれを示すものではなかつた。そのことはそれだけ支那國民經濟の建設面を遲滞せしめた例證ともなつてゐる。

金融機構の整備については貨幣市場と資本市場とを區別するにおいて、貨幣市場は工商各業の短期資本の動向を明瞭にし、資本市場は固定資本についての長期資本の動向を明確ならしむるは既に若干觸れたところである。これを具體的にいへば短期資本の市場にあつては、短期信用貸付や銀行引受手形或は商業手形の割引貸付の如きが主體となるものであるが、支那の場合、信用貸付においては發達せし向を傳へ得るところがありとはしても、短期資金の流通はこの意味においては發達の域に到つてゐない。長期資本市場においては擔保貸付や公債社債及び株式の發行、拂込についてのみならず、證券賣買に關する市場操作の如きを取上げなければならぬが、支那の

場合公債について見るべきものありとしても崎形的に展開したまでにとどまり、資本市場本来の役割を果し來つたものではない。この兩市場における資本の性格はかくの如くに需要されるものであるから、これに即應すべき資本の供給としても性格上に區別づけられるわけであり、短期資本が創造されたる信用に依存し易い向が伴ふとしても長期資本はこれに反して節約された蓄積に依存する向を持つものである。貨幣市場の分野にあつては資本は運轉資本としての性質を持ち資本市場のそれにあつては資本は建設的性質を具有することになる。

この短期資本市場としての貨幣市場と長期資本市場としての資本市場との區別がなされるは、上述せしに由來するその夫々の把持するに由るのであるが支那の場合についてはこの區別を等閑視せんとする見解もある。その理由とするところは、英・米等の如き金融組織を進歩せるものとし支那を後進性の建前においての論述である。即ち先進の國家にあつてはその該當機關と資金の源泉について明白なる區分がある故に、市場も亦分化程度に達し得るとなすが、然るに支那については金融組織が未だ健全でなく、加へて工商企業の發展状態が未だ能くこれを配合せず、金融機構をして完全な金融市場の助力を得難くしてゐるといふ。されば支那の金融組織の現況及び産業發展の實情についていへば、必ずしも過つて分化しない方が事實に適合する様に思はれるから、原來の制度を踏襲してこれを充實せしむれば可なりとするの見解である。¹⁾

併し乍ら貨幣市場と資本市場とを區別づけるについて支那の場合確然たらざるものありしは、支那金融の後進性の故に兩者の區別を不要とはいひ難いのであり、兩者の區別を判別し難いにおいて要約すべきである。長期資本は當然短期資本の用途に入り得るものであり、逆に短期資本にしてもその可能なる限度においては長期資本の用途に入り得るものである。このことは資本の缺乏してゐる場合短期資本を長期資本として用途に當てんとす

3) 高田保馬、第二經濟學概論、pp. 273-274.

4) 中國戰時金融政策之鳥瞰、第二卷第八期、p. 20.

るに強制さへ伴つて來るのであり、この質的變移は短期・長期資本の持つ性格に明確なるものを喪失せしむることになり、これに聯關して兩餘の影響を伴つて來るわけであり、支那の金融機構においてはこの點を特に看取して置く必要がある。⁵⁾

在來の支那銀行制度においては畸形的に推移したる普通商業銀行の建前において短期資本についても長期資本についてもこれを一應取上げなければならぬものとなつたのであり、短期資本と長期資本の境界は不明瞭なるものとならざるを得なかつた。資本の供給側に不鮮明なものがあつたことに對照して資本の需要側においても不明瞭なるものが伴ひ、短期資本の進路と長期資本のそれとが夫々の分野を遵守し得たものでもなかつた。必然その中間に立つてこれ等の功成機關たるべき證券市場乃至仲買機構等が投機性を多分に持つた事情もこの視野からしても抽出し得るわけである。

支那金融業の機構整備の課題に併行して金融業の業務改善として要請せられてゐるものを銀行業一般延いて中央銀行に亘つての重點的に觀察すれば次の如きが得られる。支那事變前後よりの情勢は普通商業銀行は一應制約されたる環境に處し乍ら然も猶業續に見るものありしは既述したところである。上海における遊資の集中、近年來の囤積居奇の傾向は銀行の業態を通じても既によく顯れてゐるが、銀行が遊資を吸引し建設資金として提供し得ざるについては、囤積居奇に關するものを皮相に投機行爲としてのみは輕視し難きものを伴ふ。然もこの間に處して金融機關は信用放款を擴大し自制力を喪失して居り、預金の受入が當座預金を大部分とし定期預金を僅少としてゐることに徴して、金融機關の信用放款は銀行業自體としての危機を藏するわけでもある。信用放款についての自制が要望されるに至りし所以はここにあり、そのことは信用放款に代るに放款票據化の要求ともなつて

ゐる。

この放款方式の改善については承兌貼現の課題を更新して提起して來てゐる。これを中央銀行の側面における動向に移して見れば中央儲備銀行放款の重要性増大の経緯となつて來る。ついで同業放款に對して標準限額辦法を設定せんとするものであるが、放款限度について詳密なる數字算定上の技術問題を伴つてゐる。要點は信用放款を排し抵押放款においてであり、就中定期抵押放款を主とし抵押透支並に轉抵押或は折放重貼現を若干取入れた方策において決定づけんとしてゐる。⁶⁾

現代の金融中樞たる中央銀行は發行準備の集中、預金準備の集中、國庫の經理においての主要目標を持つものであり、支那の場合もこれに近接せんとしたる推移の跡を取上げることが出来る。更に中央銀行としては上掲の短期資本の運用と長期資本の運用とに即して割引政策に公開市場操作に開拓すべき課題を持つことも支那の場合何等事情を異にするものではないが一段の複雑性が加はつてゐる。銀行制度の全面的調整を遂行するには中央銀行白體が普通銀行業務を經營しこれを商業銀行に移譲するといふ域にまで開拓の重荷のかかるものであり、先進國家における金融統制が主として既存機關の改善利用に依存し得るに比せば、後進國家は新設機關の創設、指導にまで着手しなければならない。この目的達成のためには既存の金融機構を利用する場合と、既存のものに缺くるにおいては新規に如上目標に副ふべく金融機構の新設を乃至は新分野の開拓を必要とすることになる。普通商業銀行は外貌の舊態を持続したる如きも過去の推移とは基底において事情を異にし、内實の調整に緊迫したものがあ

り、今や整備課題は大きく展開して行く。

6) 中央儲備銀行放款之重要性、中央經濟月刊、第三卷第二號、pp. 4-5.